

親戚、近所、友人とのつきあいの実態

研究開発室 小谷 みどり

－要旨－

- ① 本調査では、男性では妻の親戚よりも自分の親戚、女性では自分の親戚よりも夫の親戚とのつきあいがわずらわしいと思っている人が多かった。年齢層では40代で、自分の親戚とも配偶者の親戚とも、つきあいがわずらわしいと回答した人が多かった。
- ② 近所と「親しくつきあっている」人は、男性より女性、若い世代より高齢世代で多かった。居住年数が20年以上の人では「親しくつきあっている」人が多いものの、居住年数と近所の人とのつきあいには関係があるとはいえなかった。
- ③ 近所の人とのつきあいについては「お互いに干渉しあわず、暮らしやすいと思う」人が多く、濃密な関係を志向していない様子がうかがえた。
- ④ 今回の調査対象者では、男性の18.4%が友人はいないと回答した。全体的に、友人がいる人は女性に多いが、なかでも「困ったことがあれば相談しあえる友人」や「自分のことを理解してくれる友人」がいる人は、女性が男性を20ポイント以上も上回った。年齢層で見ると、40代では「友人はいない」人が17.2%いるうえ、友人がいる人でも、ほとんどの項目で他の世代より回答率が低かった。

1. 調査の背景と概要

(1) 調査の背景

警察庁の『平成19年中における自殺の概要資料』によれば、2007年には33,093人が自殺しており、これは過去40年間では2003年に次いで2番目に多い水準だった。年齢をみると60代以上が36.6%と最も多く、50代の21.3%をあわせると、中高年が全自殺者の6割を占めているが、働き盛りの40代、50代の自殺者の増加が近年、著しい。

一方、一人暮らし高齢者の増加に伴って、孤独死の増加も社会問題としてクローズアップされている。こうした自殺や孤独死の増加に対して、ようやく国は地域福祉の観点から防止対策に動き出したが、果たして効果があるのだろうか。

筆者の調査によれば、自殺防止対策として生活者の支持が最も高かったのは「高齢者の孤独や孤立を防ぐ対策」であり、孤独死については「日ごろから、家族が連絡を密にする」、「日ごろから近所の人たちが声かけをしたり、心配りをしたりする」とい

った項目が挙がっており、どちらも、身近な人間関係が大切だという結論に至る（小谷 2008）。

そこで本稿では、家族や親戚、近隣や友人など人間関係の実態を探り、地域コミュニティや親族ネットワークのなかでの、自殺や孤独死の防止対策が果たして可能なのかを考えてみたい。

(2) 調査の概要

<調査の時期> 2007年10月15日～11月4日

<調査対象者> 30歳から69歳までの全国の男女800名（第一生命経済研究所生活調査モニターより抽出）

<調査方法> 郵送調査法

<有効回収数> 774名（有効回収率 96.8%）

<属性>

（単位：人）

	30代	40代	50代	60代	合計
男性	98(25.5%)	95(24.7%)	96(24.9%)	96(24.9%)	385
女性	100(25.7%)	98(25.2%)	98(25.2%)	93(23.9%)	389

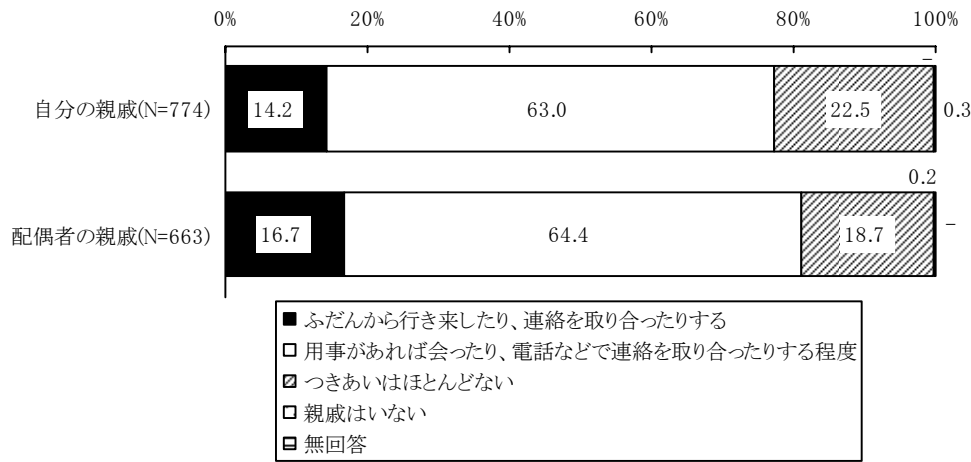
2. 人間関係の実態

(1) 親戚とのつきあい

家族以外の親戚とのつきあいについてたずねたところ、自分の親戚とは「用事があれば会ったり、電話などで連絡を取り合ったりする程度」と回答した人が63.0%と最も多く、「つきあいはほとんどない」人も22.5%いた（図表1）。

一方、既婚者（全体の82.9%）と死別者（全体の2.9%）に配偶者の親戚とのつきあいについてたずねると、「用事があれば会ったり、電話などで連絡を取り合ったりする程度」と回答した人が64.4%と最も多かった。

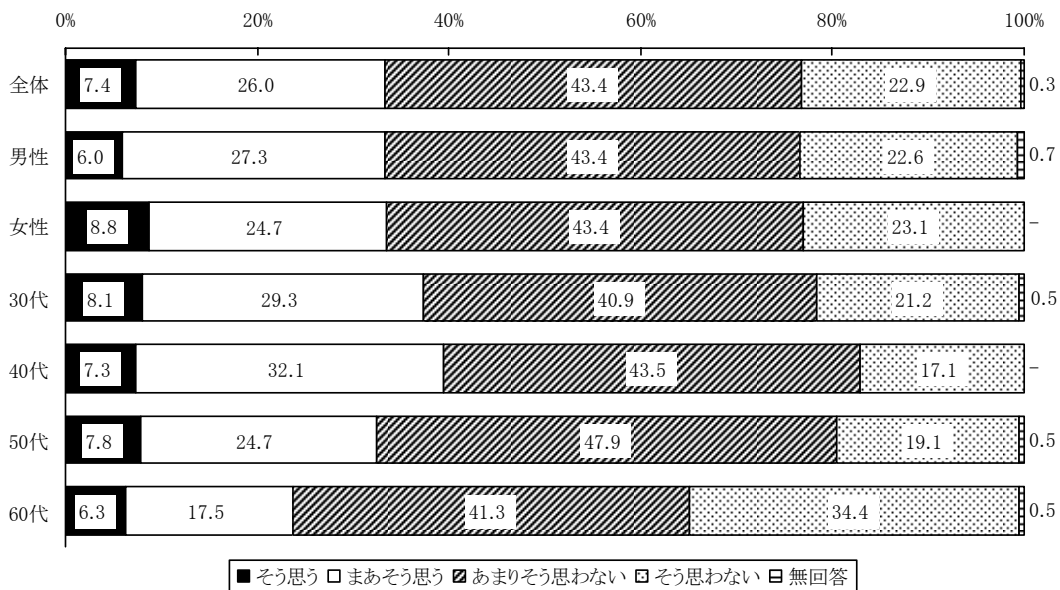
図表1 親戚とのつきあい



注:配偶者の親戚とのつきあいについては、既婚者、死別者のみにたずねた。

次に自分の親戚とのつきあいをわずらわしいと思うかたずねたところ、「そう思う」または「まあそう思う」と回答した人は33.4%いた（図表2）。性別、年齢層別でみると、性別では顕著な差はなかったが、年齢層別では50代、60代で親戚とのつきあいがわずらわしいと思う人が少なかった。親戚とのつきあいがわずらわしいと思う人は40代で39.4%いたが、60代では23.8%と15ポイント以上も少ない。年齢層別ではクラーマーVの値が0.1以上で、有意な関連がみられたが、性別では有意な関連がみられなかった。

図表2 自分の親戚とのつきあいはわずらわしいか(全体、性別、年齢層別)



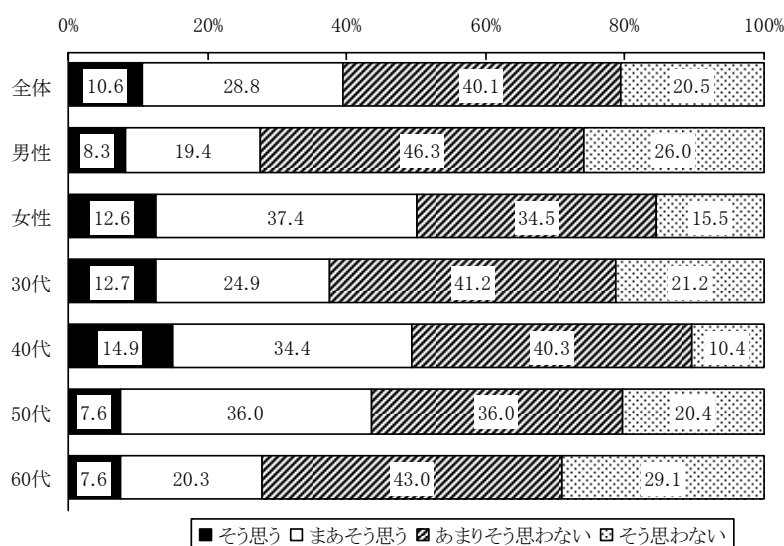
(年齢層別:Cramer の V=0.184, df=9, p<0.01)

配偶者の親戚についても同様にたずねたところ、39.4%が「そう思う」または「まあそう思う」と思っていた(図表3)。性別で見ると、わずらわしいと思っている人は、女性では50.0%と半数に達するのに対し、男性では27.7%にとどまった。自分の親戚とのつきあいについては性別で差がなかったが、配偶者の親戚とのつきあいをわずらわしいと思う人は女性に多いことから、女性には「嫁」としての立場で配偶者の親戚とつきあいをするへのわずらわしさがあるのではないかと考えられる。

一方、年齢層別では、わずらわしいと思っている人が最も多いのは40代で、49.3%いたのに対し、60代では27.9%で、20ポイントの開きがある。図表2と考え合わせると、40代は自分の親戚か、配偶者の親戚かにかかわらず、親戚とのつきあいがわずらわしいと考えている人が多い。

なお配偶者の親戚とのつきあいについては、性別、年齢層別ともに有意な関連が認められた。

図表3 配偶者の親戚とのつきあいはわずらわしいか(全体、性別、年齢層別)

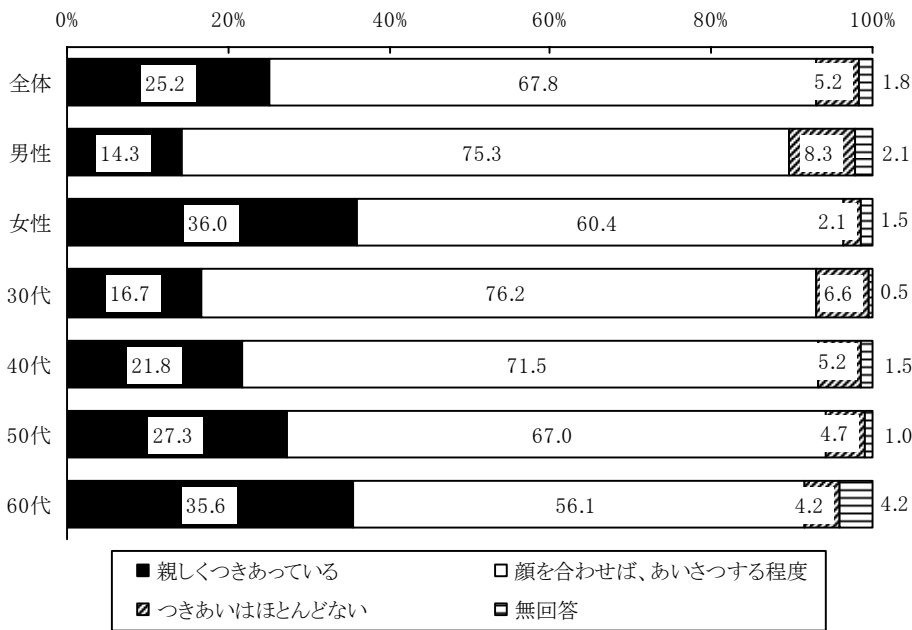


(性別:CramerのV=0.234、df=3、p<0.001、年齢層別:CramerのV=0.218、df=9、p<0.001)

(2) 近所とのつきあい

ふだん、近所の人とどの程度のつきあいをしているかたずねたところ、「親しくつきあっている」人は25.2%で、「顔を合わせば、あいさつする程度」と回答した人(67.8%)を大きく下回った(図表4)。「親しくつきあっている」人の割合は、性別では女性、年齢層別では高齢になるほど多い。なお、性別、年齢層別どちらも、近所の人とのつきあい方に有意な関連が認められた。

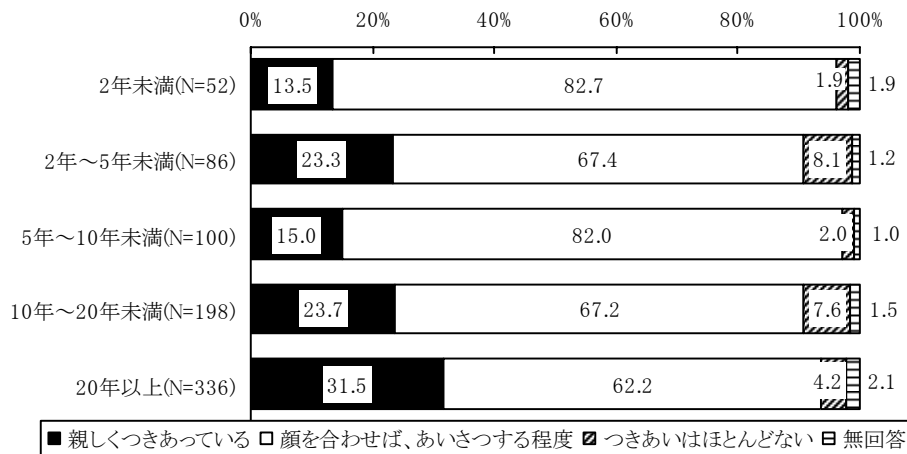
図表4 近所の人とのつきあい(全体、性別、年齢層別)



(性別:Cramer の V=0.274、df=2、p<0.001、年齢層別:Cramer の V=0.121、df=6、p<0.01)

また居住年数で見ると、「親しくつきあっている」人は「20年以上」で最も多いが、その割合は31.5%にとどまったうえ、「2年～5年未満」でも23.3%と少なくなく、居住年数が長くなるほど近所とのつきあいが密になるとは一概にいえない(図表5)。

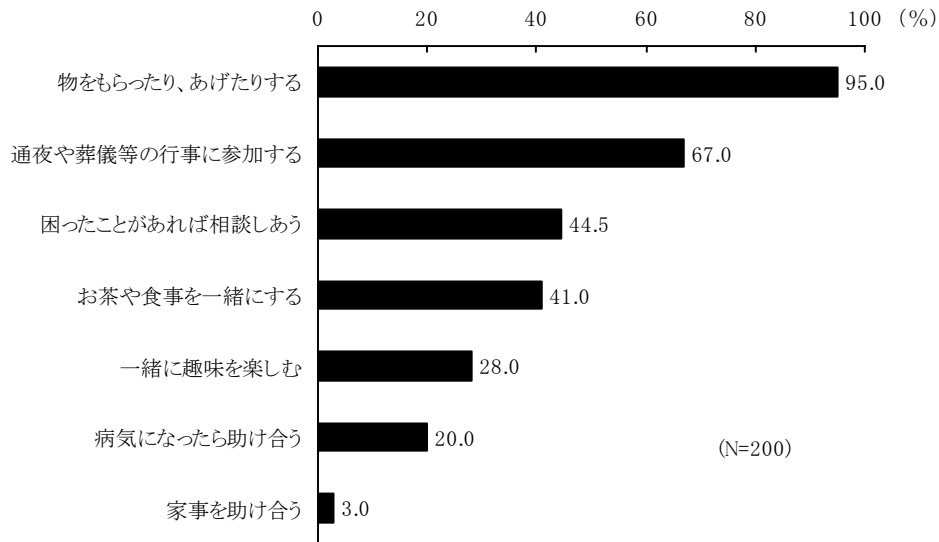
図表5 近所の人とのつきあい(居住年数別)



次に、近所の人と「親しくつきあっている」と回答した人に、どのようなつきあいをしているかたずねたところ、回答率が過半数を占めたのは「物をもらったり、あげ

たりする」(95.0%)、「通夜や葬儀等の行事に参加する」(67.0%)のみだった(図表6)。

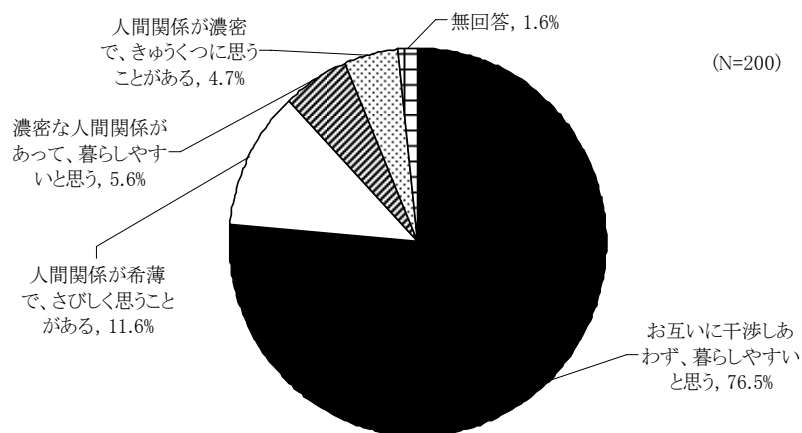
図表6 近所の人とのつきあいの内容<複数回答>



注:対象は近所の人と「親しくつきあっている」と回答した人のみ

以上のように、総じて近所の人とのつきあいは密ではなかったが、こうした近隣との関係をどう感じているのかたずねたところ、「お互いに干渉しあわず、暮らしやすいと思う」と回答した人が76.5%を占め、「人間関係が希薄で、さびしく思うことがある」人は11.6%にすぎなかった(図表7)。性別、年齢層別では特筆すべき特徴はなく、属性にかかわらず、お互いに干渉しないことが暮らしやすいと一般的に考えられていることがわかる。

図表7 近所の人とのつきあいについてどう感じているか



注:対象は、図表6に同じ

(3) 友人とのつきあい

調査対象者にどのような友人がいるかをたずねたところ、最も多かったのは「一緒にお茶や食事を楽しむ友人」(73.0%)で、そのほかに回答率が過半数を占めたのは「困ったことがあれば相談しあえる友人」(55.2%)、「自分のことを理解してくれる友人」(51.4%)であった(図表8)。

性別でみると、「一緒に趣味を楽しむ友人」以外は、すべての友人において女性の回答率が全体平均を5ポイント以上上回っていた。なかでも、「困ったことがあれば相談しあえる友人」や「自分のことを理解してくれる友人」は女性の6～7割がいると回答したのに対し、男性では4割程度にとどまっており、男女の差が20ポイント以上もあった。

年齢層別でみると、30代では「困ったことがあれば相談しあえる友人」、「お互いの家を行き来しあう友人」が平均より5ポイント以上高い。また60代では「一緒に趣味を楽しむ友人」、「一緒に旅行を楽しむ友人」が平均より5ポイント以上高く、余暇を過ごす友人を持っている人が他の世代より多い。一方、40代では、「友人はいない」人が17.2%いるうえ、友人がいる人でも、ほとんどの項目で他の世代より回答率が低かった。

図表8 どのような友人がいるか<複数回答>(性別・年齢層別・婚姻状況別)

(単位:%)

		一緒にお茶や食事を楽しむ友人	困ったことがあれば相談しあえる友人	自分のことを理解してくれる友人	一緒に趣味を楽しむ友人	お互いの家を行き来しあう友人	一緒に旅行を楽しむ友人	病気になったら助け合える友人	上記のような友人はいない
全体(N=774)		73.0	55.2	51.4	44.7	36.1	32.6	18.9	12.6
性別	男性(N=385)	61.7	41.7	40.4	41.7	23.9	24.7	12.1	18.4
	女性(N=389)	84.2	68.5	62.3	47.5	48.1	40.3	25.6	7.0
年齢層別	30代(N=198)	76.3	61.1	55.1	46.0	45.5	26.8	18.7	9.1
	40代(N=193)	68.2	53.6	44.8	35.9	28.1	20.8	15.6	17.2
	50代(N=194)	72.7	52.1	51.0	41.8	30.9	34.5	20.1	13.9
	60代(N=189)	75.0	53.8	54.9	55.4	39.7	48.9	21.2	10.3
婚姻状況別	既婚(N=639)	74.0	54.9	51.2	45.2	37.7	31.3	17.8	11.6
	死別(N=19)	78.9	89.5	84.2	52.6	57.9	47.4	52.6	5.3
	離別(N=42)	81.0	61.9	61.9	47.6	38.1	50.0	31.0	14.3
	未婚(N=68)	57.4	44.1	38.2	35.3	13.2	29.4	11.8	23.5

注: 全体平均より5ポイント高い項目に網掛け、5ポイント低い項目に下線

次に友人とのつきあいを婚姻状況別でみたところ、死別者と離別者では全体平均と比べて友人がいると回答した人の割合が総じて高く、なかでも「困ったことがあれば

相談しあえる友人」や「自分のことを理解してくれる友人」がいる人の割合が突出して多い。一方、未婚者では、「友人はいない」人が23.5%にのぼるうえ、友人がいる人でも、どの項目の回答率も全体平均を5ポイント以上下回っていた。

3. まとめ

今回の調査結果から、近所の人と濃密なつきあいをしている人は少なかったが、それを「お互いに干渉しあわず、暮らしやすい」と評価している人が大多数であることが分かった。近所の人と濃密なつきあいをしている人でも、「物をもらったり、あげたりする」や「通夜や葬儀等の行事に参加する」つきあいが主流で、「困ったことがあれば相談しあう」、「病気になったら助けあう」といったメンタルなつながりは薄かった。冒頭に述べた孤独死を防止する施策は地域福祉の問題として捉えられる傾向があるが、人々は近所の人との希薄な関係性に居心地の良さを感じているなか、地域でどのように孤独死問題に対処していくべきなのか、課題は多い。希薄な関係性に満足している住民が多い地域において、どのようにして孤独死や自殺防止を自分たち地域の問題として認識させていくのかといった、根本的な問題もある。

一方、メンタルなつながりは友人との関係においては見出せた。しかし男性では、自分を理解してくれる友人がいる人は女性より少なく、一緒にお茶や食事、趣味や旅行を楽しむ友人も含め、そもそも友人がいない人も少なくなかった。また年齢層別では、40代で友人がいない人の割合が多かった。今回の調査では、親戚とのつきあいがわずらわしいと思う人が40代で最も多いこと、さらに種々の世論調査からも、40代は、家庭や職場で悩みやストレスを最も抱えている世代であることが明らかになっている（第一生命経済研究所 2005、内閣府 2008など）。近年、40代から50代の自殺が増加していることをかんがみると、なぜこの世代で、人間関係の悩みやストレスを抱える人が多いのかについて更なる研究が必要であろう。

(研究開発室 主任研究員)

【参考文献】

- ・小谷みどり，2008，「自殺と孤独死に対する意識」『Life Design Report（2008年5-6月号）』第一生命経済研究所：4-15.
- ・第一生命経済研究所，2005，『ライフデザイン白書2006-07』矢野恒太記念会.
- ・内閣府，2008，『自殺対策に関する意識調査』.